

大学図書館における電子ジャーナルの閲読と引用の
オブソレッセンス分析
Analysis of the Obsolescence of Citations and Access in Electronic
Journals at University Libraries

学籍番号：201221589

氏名：武井 千寿子

Chizuko TAKEI

大学図書館では、継続的な図書館予算の削減や電子ジャーナルの価格高騰などの影響を受け、Big Deal の購読維持が近年深刻な問題となっている。Big Deal 離脱時のセーフティネットとしてバックファイル整備が急務となっているが、効果的な導入方法の検討はほとんどなされていない。バックファイルの検討には、文献利用の廃れ（オブソレッセンス）の観点が必要である。引用と閲読のオブソレッセンスの対応が把握できれば、引用のオブソレッセンスの情報に基づいて閲読のオブソレッセンスを見積もることが可能となる。しかし、両者の対応に関する既往研究の多くは、少数の分野を対象にした調査に留まる。

そこで本研究では、SpringerLink 全 11 分野と ScienceDirect の 20 分野から分野毎に無作為抽出した学術雑誌約 1,200 誌を対象に、今まで取り上げられていない指標も用いて、分野毎の引用と閲読のオブソレッセンスの相関を分析した。Journal Citation Reports (JCR) や利用統計から抽出・算出した、オブソレッセンスに関する指標である Cited Half-life (CHL)、Download Half-life (DHL)、Immediacy Index / Impact Factor (II/IF)、Download Immediacy Index / Download Impact Factor (DII/DIF) と、文献利用に関する指標である II、IF、DII、DIF の 8 つの指標を用いて調査した結果、物理学をはじめとする医学以外の理系分野において、CHL 対 DHL の長期におけるオブソレッセンスに関する指標間で 0.4 以上の有意な相関が観察された ($p < 0.05$)。すなわち、医学分野を除く理系分野においては、JCR から入手可能な CHL の値に基づいて、バックファイル導入後の効果をある程度予測可能であることが明らかになった。また、ScienceDirect の 2011 年と 2012 年の比較結果から、年によって心理学などでは相関の程度が著しく変動する可能性があることと、より強い相関を示す指標が異なる可能性があることが示唆された。

ただし、今回の調査対象が一大学のみであったことから、本研究の結果が、他大学にも適用可能かどうかは推測の域を出ない。そのため、より一般的な知見を得るため、調査対象を拡げ、大学の種類や規模の影響を踏まえたより広範な調査が必要である。また、観察年によって相関の程度に著しい変動が見られた分野については、その要因についてより長いスパンで観察し、精査することが望まれる。

研究指導教員：芳鐘 冬樹

副研究指導教員：逸村 裕